# 稲二把物語

むかしむかしの、ある夏の日のことであった。「佐渡が来た。佐渡が来た」道を通る人々は、あわてて、ほほかむりを取ると「だんなさまよいお天気でございます」と、はれ物にでもさわるように小腰をかがめて頭を下げるのであった。

この人は、佐々木佐渡という強慾非道で評判の大地主。たくさんのお百姓たちが、この人の持っている土地を小作してくらしていた。

小作というのは、地主（土地を持っている人）から田畑を借りてたがやし、とり入れがすむとその中から（小作米）を納める約束で今年は天候が順調なので、佐渡は上きげんであった。百姓たちの頭が、みな米俵に見えてくる。また、あの大きな米倉が年貢米でいっぱいになると思うと、ひとりでにほほがゆるんでくる。

「おれを強慾だのなんのといったって、小作米をとって何が悪いのだ」佐渡は意気ようようと歩いてゆく。ふとみると、路傍に、見るからに丈夫そうな若者が、じっと自分を見て立っている。佐渡は「いいからだをしているなあ、こんな若者ならよく働けるだろうなあ」と思った。「こらこら若い者どこへ行く？」「どこでもやとってくれる人をさがしている」佐渡は、さっそく「賃金はいくらだ？」と聞いた。「秋上げまで働らいて稲一荷（ひとせ＝ひと背負い）」佐渡はこれを聞いて大喜び、「たった稲ひとせが」



聞けば、この若者は秋田から来たという。佐渡が見込んだだけあって、実によく働く。朝はまだ星のあるうちに起きて、馬の手入れから庭のはきそうじ、連日、田畑に出て、人の二倍近くもたがやし、何ひとつ取り落しのない仕事ぶり。佐渡はお気に入りで、秋田、秋田と人が来るたびに、この若者をほめそやすのであった。

この年は、幸い天候もよく、二百十日も何事もなく過ぎて大豊作、稲刈りも終りハサがけされた稲は取入れを待つばかりとなった。佐渡は大喜びで秋田から来たその働き者の労をねぎらい、近く秋休みを与える約束した。

この日から若者は、すっかり変わった。仕事が終わると小屋に入ってガッタン　ゴットン、一心に何かを作っていた。いよいよ秋休みの始まるその前日、佐渡の前に進み出た若者は、「長らくお世話になりました。明日で、おいとまをいただきとうございます」突然の願いに佐渡はびっくりしたが「そうか、やめるとなれば仕方がない。お前の賃金は稲一荷（ひとせ）であったな。背負って行くがよいぞ」

「かしこまりました。ありがとうございます」一夜が明けて、佐渡はびっくりした。秋田の若者は、長い丈夫なわで大きな網を作って用意していた。その網で、山のように積んである今年とれた稲をそっくりつつみ、かるがるとそれを背負うと、さっさっさと歩き出したではないか。

「これ秋田、待て待て」佐渡は大声で叫んだが、その足の早いこと早いこと、あれよあれよと見る間に若者の姿はたちまち秋田の方に見えなくなってしまった。

余りのことに、ぼんやりしてしまった佐渡は、はっと我れに帰ると、秋田をおさえる時、手に残った、稲二把がさびしく秋風にゆれていた。

それからは、さすが強慾の佐渡も心を改め、良い地主となって、その家も長く栄えたという。

稲庭という地名は、この時、佐渡の手に残った「稲二把」からつけられたという。またこの時の秋田の若者というのは、秋田、大平山（おいだら）の三吉神社の三吉さんであったということである。稲庭の郷土史家、佐藤清司翁の書いた「稲庭村適産調旧蹟考」という本には、佐渡のやしき跡といわれる地図も出ている。それには次のような説明がついている。

「当村豪農、佐々木佐渡という人の住みたる、そのはじめを知らず。稲庭村の村名、いまだ無かりし時なり、などと、古老、口碑に伝えその時の屋敷、いつしか開田となり、字古屋敷、又は屋敷前などともいう。その後、小野寺氏、当地に在城の際には、上段に屋敷をもうけ、別紙図面の通り、字横町冷泉より、花市坊（盲目）屋敷の脇坂を西に下り、田地用水橋の上へ、土手涯北へ折り廻り、西は小野寺氏が政事を執りし時の刑場（古より里俗、今に至るまでセト場という）道の段切り、東は横町冷泉より元街道北に向って下り、刑場へ下り口の道脇、土手切り囲いの内にて、一町歩余が佐々木佐渡の屋敷なりという、漸々微禄して、名細き有姿となり今日に至るなり。

今の街頭は、享保年中、三嶋より西に曲りて、又南に登り、佐々木氏の元屋敷を裂きて、花市屋敷西辺に出て、善竜寺に至る。早坂への坂道は、下タ道のところ、栗原仁兵衛肝煎勤中、文政十一子歳、大沢向に新道を開鑿し、館の腰を通り、早坂不動堂（今木神社）の前に出、巽（東南方）に向って皆瀬村川向に至るなり。」（稲庭古今事蹟誌、稲庭村適産調旧蹟考、稲川町史資料編、秋田民話集などによる。）